



# 奪取られマソの 肩チンマスター

DOJIN  
R18  
成人向け

18歳未満の  
購入・閲覧禁止

めすとらだむす

カルデアの静かな一室、マスターである俺は、緊張で心臓がバクバクしていた。

目の前には、マシユ・キリエライトが控えめに座っている。

彼女の髪がかった髪が柔らかく揺れ、無防備な姿が、いつもより近く感じられた。

「先輩…本当に、いいんですか？」

私、初めてなので…」

マシユの声は少し震えていたけど、信頼と愛情がこもっていて、俺の決意を後押しした。

「うん、マシユ。俺も初めてだけど…」

君とだから、大丈夫だよ」

そう言っていて、俺たちはぎこちなく抱き合い、服を脱ぎ始めた。

マシユの白い肌が露わになるたび、

俺の緊張は高まる一方だった。

いよいよその瞬間、俺がズボンを下ろすと、マシユの視線が俺の下半身に注がれた。

「え…先輩、これ…？小さい…」  
彼女の声に驚きが混じっていた。

俺の粗チン——正直、自分でも小さいことは  
自覚してたけど、マシユの反応は予想以上に  
ストレートだった。

マシユは慌てて手を振った。

くちゅ…

ニャー

「ぐいぐいめんなさいー！そんなつもりじゃ…！」  
気を取り直そうと、マシユが優しく  
微笑んで手を伸ばしてきた。

「先輩、…気持ちよくなってももらえたら、嬉しいです」

彼女の細い指が俺に触れた瞬間、電気が走ったみたいにとびクツとなってしまうた。

マシユの手は柔らかくぎこちないながらも丁寧で、俺はすぐに限界を迎えた。

くちゅ…

ニゅわ…

ニゅわ…

「マシユ、待って…もう…!」

数回動かされただけで、俺は我慢できずギョーと射精してしまった。

「え、せ、先輩…? もう…?」

マシユが目を丸くして、ちょっと笑いを堪えてるのがわかった。恥ずかしさで死にそうだったけど、彼女は優しくティッシュで拭いてくれた。「…いめん、マシユ。もう一回、ちゃんとしよう」

くちゅ…

んんん…

ニゅわん…

んんん…

俺は気を取り直して、マシユをベッドに横にさせた。彼女は頷いて、恥ずかしそうに足を開いた。いざ挿入しようとしたけど…正直、俺のサイズじゃ、マシユは感じてくれるかどうか…

くちゅっ……

くちゅっ……

「ん…先輩、えっと…入ってますか？」  
マシユが少し困惑した声で聞いてくる。

彼女の表情を見ると、明らかに感じてない  
のがバレバレだった。

それでもマシユは、俺を傷つけないように  
気を使ってくれた。

「あ、んっ…せ、先輩、気持ちいい…ですっ」  
彼女の喘ぎ声は、わざといらしかなかった。

優しさゆえの嘘だとわかってるけど、  
なんかそれが逆に興奮してしまった。

「マシユ、うううっ…」

くちゅ...  
くちゅ...

Over-50

そう言った瞬間、俺はまたすぐに  
限界がきて、そのまま射精してしまった。

「せ、先輩...もう、メーっちゃいました...?」

「マシユ、ごめん...全然ダメだったな」

「そんなことないです、先輩！私、  
こうやって一緒にいらられるだけで...  
本当に幸せですから」

あの日から俺はモヤモヤが止まらなかつた。  
マシユとの初めての夜、彼女は優しく  
笑ってくれたけど、あの嘘偽りが頭から  
離れない。

本当に満足してくれたのかな？

俺の粗チンビじゃ、彼女を幸せにできないん  
じゃないか？ そんな思いがぐるぐるして、  
とうとうとうんでもない考えにたどり着いた。

「マシユ…ちょっと相談があるんだけど」  
カルデアの自室で、俺はマシユを前にして  
口を開いた。彼女はいつものように穏やか  
な笑顔で

「はい、先輩。なんですか？」と答えた。



「その…俺、粗チンだから、マッシュユが  
本当に満足してるのかわからなくて…。  
だから、ほかの、えっと…デカイ人と試して  
みて、ホントの気持ちを知りたいんだ」  
言葉を運びながら、俺は顔を真っ赤にして  
言った。

マッシュユは一瞬、目を丸くして固まった。  
「せ、先輩！？そんな…私、先輩だけで  
十分なのに…！」

彼女の声は動揺で震えてたけど、俺が必死に頼むと、彼女は目を伏せて小さく頷いた。

「…わかりました。先輩がそこまで言うのなら…私、試してみます。」

でも、先輩、私の気持ちは変わりませんから「マシユの優しさに胸が締め付けられたけど、俺は覚悟を決めた。」



相手は、カルデアアの職員の一りで、噂で「デカイ」と有名な男、俺が事情を話すと、笑いながら了承してくれた。

その夜、カルデアアの空き部屋で、

俺は息を潜めて見守るにじりじりした。

マッシュは緊張した顔で職員の前にはた立っていた。

えっとう…

よろしくお願ひなさい。



マシユがぎこちなく挨拶した瞬間、  
俺の心臓がドクンと跳ねた。  
彼女の白い肌が露わになり、  
職員の手がマシユの胸に触れる。

マシユは「んっ…。」と小さく声を漏らして、  
俺はもう目が離せなくなった。

むっむっむっ

むっむっむっ

むっむっむっ

むっむっむっ

職員がズボンを下ろすと、噂通りの  
デカチンが現れて、マシユが「ひっ……！」と  
小さく驚いた。俺の粗チンどは  
比べものにならないサイズだ。……っ

職員はコンドームを手慣れた様子で  
装着し……

挿入の瞬間、マシユの音が「変じた。  
「あっ……んんっ！あ、すっ……！」

……っ  
……っ  
……っ



普段の控えめなマシユからは想像できない、  
切なげで甘い喘ぎ声。彼女の体が動きに  
合わせて揺れるたび、  
「あっ、あんっ！や、深……ドドと声が漏れる。

俺はただ見てるだけで我慢汁が  
溢れ出してた。

マシユがこんな感じにいる姿、  
初めて見た。俺じゃ絶対に出せない声だ。

「せ、先輩……！「めんなさい……でも、んっ！  
これ、すげえ……！」



「せ、先輩……！」「めんなさい……でもっ！」「これ、すぐく……！」

マシユが必死に俺に訴えるけど、すぐにデカチンピストンの動きで「ああっー」とまた喘ぎに戻ってしまっ。

彼女の顔は赤く、目は潤んで、完全に快感に溺れてる。

その姿に、俺の粗チンは触ってもいないのにビクビクしていた。

マシユが「やっただめっ、っー」って叫んだ瞬間、職員がさらに激しく動いて、マシユが「んああっー！」と絶頂を迎えた。

その声と表情を見ただけで、俺は我慢できずに射精してしまった。

「せ、先輩……！ごめんなさい……でも、んっ！  
これ、すぐぐくて……！」  
マシユが必死に俺に訴えるけど、  
すぐにデカチンピストンの動きで  
「ああっー！」とまた喘ぎに戻ってしまっ。

俺の粗チンは触っても  
いないのにビクビクしていた。  
職員がさらに激しく動いて、

マシユが「んああっ……！」と絶頂を迎えた。  
その声と表情を見ただけで、  
俺は我慢できずに射精してしまった。

ごめんなさい  
んっ

薄暗い照明の下で、マシユはベッドに横たわ  
彼女の呼吸はまだ乱れ、髪が汗で額に張り  
付いている。デカチン職員との

「寝取らせ」の行為が終わったばかりだ。  
ひいひい

「はあ…はあ…」  
マシユは小さく息をひき、  
シーツを握りしめた。

んんんんん

マスターとのぎこちない初めてとは  
比べものにならない、圧倒的な肉体的な  
充足感…♡

その姿を見ながら精液をお漏らしする…  
情けない俺…

そしてマッシュユは職員が提案される  
マスターは寝取られマゾだからもっとう  
喜ぶ方法があると、  
一ヶ月の射精禁止、もちろんマッシュユの  
セックスは禁止、しつこくオマレ  
その間に職員とは彼氏と彼女の  
関係になるという契約…

俺とマッシュユはそれを了承してしまった…

カルデアの自室、俺は冷や汗を流しながら  
ベッドに座っていた。

下半身には、職員の提案で装着された  
貞操帯が重くのしかかる。

一ヶ月間の射精禁止、マシユとの

セックスも禁止、そしてマシユは彼と  
「彼氏彼女」の関係になる——あの夜、

彼の言葉に押され、寝取られマジの  
氣質を暴かれた俺は、半ば自棄になって  
この提案を受け入れた。

「先輩、大丈夫ですか？ 顔、赤いですよ？」

ふっふっ

はあっ

ふっふっ

マジユ・キラナイトが、

いつもの優しい

笑顔で近づいてくる。

だが、その目はどこかいらたずらっぽく、  
いつもと違う雰囲気があった。

彼女は貞操帯で勃起すらできない俺を  
誘惑してくる……

そっぴなむねとらしく体を寄せてきた。

「ま、マジユ……ちょっととっほいっひ……」

俺が慌てて言うつと、マッシュはぐさっと笑つ、  
彼女の柔らかいおっぱいが、  
俺の顔にムニユツと押し付けられる。

「ふっふ、先輩、こんなのでグキドキしてゐる  
ですか？ 貞操帯つけてて勃起するっ  
できないのに、かわいいですね」

マッシュの声は甘く、まるで俺を試みてる  
つらにおっぱいを押し付けへへ。

貞操帯の中で、勃起しようとするが  
締め付けられ、鈍い痛みと熱が下半身を  
支配した。

「うっ…マッシュ、やめてくれ…！  
こんなの、耐えられない…！」

俺が情けなく言っつと、マッシュは「でも、先輩、これが好きなんですよな？」職員さんが言っつてましたよ、先輩はこういうの我慢するの、興奮するっつて」

優しいのに意地悪な口調で続けた。彼女はさらに身を寄せ、耳元で囁く。「我慢汁、垂れてますよ、先輩。」

貞操帯の隙間から、びしょびしょです。マッシュの指が、貞操帯の縁を軽く撫でる。触れられない下半身がビクビク反応し、透明な液が滴るのが自分でもわかった。羞恥と快感の狭間で、俺の理性はぐらついていた。

「マッシュ…お願いだ、解放してくれ…！もう、射精させてくれ…！」

「先輩、射精したいなら…代償が必要です。  
いいですよね？」

むいっ

彼女の言葉に、俺は嫌な予感がした。  
「代償って…何だ？」

むいっ

マシユは少し声を低くして、  
はつきりと言った。

「職員さんと、私…生ハメ中出しセックス  
します。先輩の目の前で。それでよければ、  
貞操帯、解放してあげますよ」

心臓が止まりそうだった。マシユの口から  
そんな言葉が出るなんて、  
想像もしてなかった。

でも、貞操帯の締め付けと一ヶ月の禁欲で、  
俺の頭はまともな判断ができなかった。

「…わかった。いいよ、やってくれ…」

ただ、早く解放してほしい…」

俺は自分でも信じられない言葉を口にした。

おっっっ

おっっっ

射精欲に負けて…

最愛の人を…他の男に差し出したのだ…

挿入の瞬間、マシユの音が部屋に響いた。

「あっ…！ や、深い…んんっー！」

彼女の甘い喘ぎ声は、あの夜と同じく、  
俺の粗チンでは引き出せないものだった。

リズムに合わせて、マシユの体が揺れ、

「ああっ、ああんっ！すっごお……！」  
と声がち切れ切れに漏れる。彼女の目は潤み、  
快感に溺れる表情は、俺の心を抉った。

んんんん

んんんん

んんん

んんん

んんんん

マシユは「んああっ！だめえっー！」と絶頂を迎えた。彼もマシユの中で果てた。

ぽちぽち...

ひゅひゅ...

ひゅひゅ... ぽち...

俺のちいさいおちんちんは貞操帯の中でビクビク震えていた。我慢汁が床に滴り、頭は真っ白だった。

ぽち...

行為が終わり、マシユは息を整えながら俺に近づいてきた。彼女の顔は赤く、余韻に浸っているのがわかった。

ぽち...

ぽち...

「先輩…約束、守りましたよ。射精、  
させてあげます」

俺は安堵しかけたが、マシユの次の  
言葉で凍りついた。

「でも、今日とは言ってません。もう一ヶ月、  
待っててくださいね」

彼女の声はどろろと冷たく響いた。

「何ー？マシユ、そんな…」

俺が叫ぶと、マシユは悲しげに微笑んだ。

「先輩、これが好きなんですよよね？」

私、先輩の望むこと、ちゃんとやって  
あげたいんです。もう少…

我慢してください

じゃあ、私、これから職員さんの

部屋に行ってきますね…」

一人残された俺は、貞操帯の重さ

我慢汁の冷たさに震えた。屈辱と

興奮が混ざり合う。もう一ヶ月、

これが続くのか。

カルデアの医務室、消毒液の匂いが漂う静かな空間。

俺は、射精欲に耐えながら、職員に呼ばれてやってきた。

さらだ一ヶ月の射精禁止、というマシユの提案で始まったこの状況に、俺の心は屈辱と興奮でぐちゃぐちゃだった。

彼ははニヤリと笑い、医務室の奥にあるカーテンで仕切られたスペースに俺を案内した。

椅子に座らされた、

「ちょっと待っていて」

とだけ言って、彼はカーテンの向こうに消えた。

俺が不審に思っている中、

カーテンの隙間から微かな声が聞こえてきた。聞き覚えのある、柔らかい声——マシユだ。

「職員さん…(´▽`)ノ事務室ですけど…  
本当に大丈夫ですか?」

マシユの声は少し緊張しているが、  
どこか甘えるような響きがあった。  
俺は息を止め、カーテン越しに覗いた。  
そこには、マシユ・キリエライトが

彼と抱き合っていた。

マスターが見ているなんて、

彼女は知らない。

「大丈夫だよ、マシユ。誰も来ないって」  
彼が低く笑い、ズボンを下ろす。

現れたデカチンに、マシユが

「…っ」と小さく息を飲むのが見えた。

俺の粗チンとは比べものにならない  
サイズだ。

マシユは一瞬躊躇したように見えたが、  
ゆっくり膝をつき、デカチンを見上げた。



ちゅっ、

ちゅっ、

ちゅっ、

「マッシュ、うまいよ…ほんと、うまいですね」  
彼が満足げにマッシュの頭を撫でると、  
彼女は「んっ…嬉しい…」と小さく笑った。  
フェラが終わると、服を全て  
マッシュは脱ぎ…

「職員さん…優しくしてくださいね…」  
マッシュの声は甘く、しがじゅじゅが  
切なげだった。挿入の瞬間、  
彼女の体がビクンと跳ね、声が  
医務室に響いた。

ちゅっ、

「あっ……んんっ、深い……！」

リズムに合わせて、彼女の体が揺れ、マシユは気持ちよさそうな声を上げてる。

「ママ、気持ちいいだろっ？」

もっとう声出していいよ」

「んああっ……だめっ、声……出さちゃっ……！」  
「……」

あーっ

俺はただ見てんあッいることんあッしかできず、

我慢汁が滴り落ち、ズボンに染みが広がる。

射精したいという欲が頭を支配するが、金属の拘束がそれを許さない。

ギッシ!

マツモト

「ちっ…職員さんっ…んっ…」と

絶頂に達し、彼も低く唸って果てた。

彼女はベッドにぐったりと沈み、

余韻に浸るようだった…

ムムム

マッシュが服を整え、職員に名残惜しくキスを

して…

事務室を去っていく…。

ムムム

ムム

ギッシ!

ムム

ムム

ムム

ムム

ムム

ムム

ムム

「マジユ…なんで…こんな…」  
俺の眩きは、誰にも届かなかった。

彼女は俺が見ていたことを知らない。

職員はカーテンを開け、ニヤリと笑って  
言った。

「いろいろ見せたところ？射精解禁日は  
もっといろいろ見せてやるから  
楽しみにしなよ」

クン…クン…悔しい…

だが興奮が止まらなかつた…

カルデアの自室、時計の針が夜を告げる、  
ついに射精禁止期間が解禁された日だ。

マッシュが部屋に入ってきた瞬間

俺の心臓は期待と不安でバクバクした。

彼女はいつもの優しい笑顔ではなく、  
どこか冷めた表情を浮かべていた。

「先輩…お待たせしました。今日、

解禁日ですよね。

久しぶりに…セックス、してあげます。」

マッシュの声は柔らかかったが、

どこか機械的で、俺の胸に違和感が走った

彼女が手に持っていたのは、シリコン製のオナホールだった。

「え、マシユ…それ、なに…?」

俺が動揺して尋ねると、マシユは笑いながら答えた。



「先輩の相手は、これです、おちんちん小さいから私が直接するのは…ちよつと、でも先輩の好み、わかっちゃいましたから」

マシユに全裸にさせられ貞操帯で締め付けられていた粗チンが久しぶりな解放される、すでに半勃ち状態だった。

ふふ、先輩のおちんちん前より  
小さくなっただけじゃないか……？  
マシユが冷たく笑い、  
おちんちんにオナホールを挿入させ、  
ゆっくり動かし始めた瞬間、強烈な快感が  
全身を貫いた。

「うっ……あ……んあ……」

二ヶ月ぶりの刺激に、情けなく喘がされ、  
声が漏れる……  
俺の見栄を一瞬で崩壊させた。

ぐちゃ

ビュッ

ぐちゃ  
ビュッ

マシユはベッドの端に座り、  
俺を見下ろす。その紫がかかった瞳は、  
まるで実験動物を観察するようつに  
冷たかった。

「先輩、そんな声…恥ずかしいですよ、  
もつと我慢しないと、もう二度と私と  
セックス出来ませんよ」

彼女の言葉が胸に刺さる。

なのに、俺の体は快感に逆らえず、  
腰が勝手に動いてしまう。

オナホールのリズムミカルな動きに、  
すでに我慢汁が溢れ、ぐちゅぐちゅと  
卑猥な音が部屋に響いた。

「先輩、せっかくの解禁日ですからから  
特別なもの、見せてあげます」

ビュッ

ジュッ

マシユが冷たく微笑み、部屋のモニターをオンにした。画面に映ったのは、

ちゅっ♡

マシユと職員のセックス動画だった。

彼女が「デレンジャラスビースト」のエロい衣装——紫の露出度の高い

コスチュームに身を包み、彼と絡み合う姿。

「マシユ……これは……うっ……！」

俺が叫ぶが、マシユは無視じで

オナホールを動かし続ける。

画面の中で、マッシュは彼と向き合おう、媚びるように見つめていた。

ちゅるる♡

「職員さん…大好きです…んっ、ちゅ…」

彼女の唇が彼の唇に重なり、濃厚なディープキスが始まる。

舌が絡む音がスピーカーから響き、マッシュの甘い吐息が俺の心を抉った。彼女の目は潤み、まるで彼だけが世界にいるかのように見えた。

キスが終わると、マッシュは膝をつき、彼のデカチンを愛おしそうに撫でた。

「こんなに大きくなつて…私、嬉しい…」  
彼女が胸を寄せ、パイズリパイズリを始める。  
柔らかいおっぱいがデカチンを包み込み、  
ゆっくり上下に動く。彼が  
「マシユのデカパイ最高だよ」と隠ると  
彼女は「ん…もっと、気持ちよくして  
あげますね…」と囁いた。  
俺の粗チンでは絶対に耐えられない  
ご奉仕だ。

ううああ…♡  
マシユのおっぱいがムニユムニユと  
デカチンを扱く姿は妖艶で我慢できずに  
射精した…

すっ  
すっ  
すっ

すっ  
すっ  
すっ

あっ、もっ、出たんですな……

二ヶ月ぶりの射精は気持ちいいんだけどな。…  
まだ始まったばかりですよ……

「ひゅ……ん……」



どんどん、先輩とっこの「抜き所」がある…  
と思いますよ♡

デカチンが完全勃起すると、マシユは彼のの上に跨がり、騎乗位で挿入した。

「あっ……んんっ……大好き、職員さん……♡」

ばちゃんっ

彼女の喘ぎ声は、まるで文尾のような野性的な響きを帯びていた。腰を激しく振り、

ばちゃんっ

「あっ、あんっ！や、す……好き、好きっー！」と叫ぶマシユ。

彼女の体が揺れ、髪が乱れ、快感に溺れる表情は、俺が見たことのないほど淫らだった。

画面のマシユは彼に「大好き、ずっと一緒に……！」とラブラブな言葉を重ね、絶頂を迎えた。

彼も彼女の中で果て、二人とも余韻に浸るばづに抱き合った。

ばちん

おん

おん

その姿を見た瞬間、俺はまたすぐにオナホールの中で我慢できず、連続で射精してしまった。「うっっ……あぁっ、んあぁ……！」

情けない声が部屋に響き、快感と屈辱が混ざり合う。だが、マシユの手は止まらない。冷たい目で俺を見ながら、オナホールをさらに激しく扱き続ける。

「先輩、またイっただんですね、本当に、寝取られ好きなんです」

彼女の声には、どこか軽蔑と哀れみが混じっていた。

動画がループ再生され、マシユの「大好き、職員さん……」が何度も響く。俺は射精を繰り返して、頭が真っ白になるまで射精した。マシユは無言でオナホールを動かして、俺の情けない姿をただ見つめていた。

行為が終わり、マシユはオナホールを片付け、モニターをオフにした。

俺はベッドに崩れ落ち、息を吐らしていった。彼女は冷たく言った。

「先輩、楽しかったですよね？」

もっと気持ちよくなりたいたいですか？」

その言葉に、俺は震えた。

マシユの冷たい目は、

俺の寝取られマゾの欲望を見透かしているようだった。

そして…

次の射精管理のときもある日…

俺は目を疑っていた  
目の前には、全裸のマッシュ  
彼女の白い肌が照明に映え、

紫がかかった髪が柔らかく揺れる。  
だが、肝心な部分——

おっぱいや下半身にはまるで  
モザイクのような光のフィルターが  
かかり、ぼやけて見えない。

クス

「先輩…どうしたんですか？」

私の裸…いかがでしょう？」

マッシュユがどこか楽しげに言う。  
彼女は胸を隠さうともせず、

堂々と立っている。その自然体な姿が、  
俺の心臓をバクバクさせた。

クス...♡

「マッシュユ、な、なんで見えないんだよ、  
これ!？」

俺が慌てて叫ぶと、  
背後から軽やかな笑い声が響いた。

「ふんふん、マスターくん、いい反応だね  
私の最新魔術実験の成果さー！」  
ダヴィンチが説明を始めた。

「マスターくんの魔術回路にちよっと  
細工させてもらったよ」

「粗チン補正フィルター」って  
呼んでるんだけどね、要するに、  
君の…その、小さいおちんちんの  
サイズに比例して、魅力的な部分が  
見えなくなる仕組みさ、マシユの  
美しいおっぱいやあそこ、残念ながら  
君にはフィルターがかかるとように  
なったのさ。

ダヴィンチの言葉に、俺は動揺した。

私もマシユに頼まれた時は  
戸惑ったけどこっついうっプレイなんだって？  
愛の形は自由だね…  
じゃあ、私はこれで…

マシユと二人きりになった実験室。  
彼女はまた全裸で、フィルターのせいで  
おっぱいや下半身は光のモザイクに  
覆われている。俺は目を逸らそうとしたが、  
マシユが一歩近づいてきた。  
「先輩…私の体、  
ちゃんと見えませんか？  
ふふふかわいそうですね」

彼女の声は優しいのに、  
どこか意地悪な響きがあった。

マシユはわざと胸を突き出すように  
ポーズをとり、モザイクが揺れる。  
「先輩の…その、  
小さいおちんちんのせいで、クスクス…」



「だって、先輩、粗チンだからですよわっ  
私、ちゃんと見せてあげてるのに、  
モザイクがかかっっちゃうなんて…  
情けないです…」  
マシユが手を腰に当て、モザイクの  
部分を強調するように体をくねらせる。

彼女の冷たい視線とからかいが、  
俺の羞恥心を煽る。ズボンの中で、  
粗チンから我慢汁が滲み始めた。

「ふふ、先輩、興奮してらるんですか？  
見えないのに、こんな反応…本当に、  
マゾなんですね」

マシユが近づき、俺の耳元で囁く。  
彼女の吐息が首に当たり、彼女の香りに、  
頭がクラクラした。

クス…

「マシユ…やめてくれ…  
こんなの、耐えられない…」  
俺が喘ぐように言いつつ、  
マシユは一瞬、目を細めた。

「先輩、こっちはやっでからかわれるの、嫌いじゃないですよね？」  
「わかつちやいましたから」

彼女の言葉は、まるで俺の心を

見透かしているようだった。

マシユは冷たく微笑み、  
俺は膝を震わせ、ズボンに染みが  
広がるのを感じた。

触れられない、射精できない、  
見れない、それが、俺の寝取られマゾの  
欲望をさらに煽った……。









































